＜プロジェクト紹介＞

東日本大震災応急仮設住宅における「心のケア」に関する試み
－千葉県旭市における「造形」及び「遊びリテーション」活動等の実践をもとに－

松下やえ子　・　森　　洋子

【要旨】

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災により千葉県旭市の一部が津波と液状化の被害を受けた。被災地では、特に独居高齢者の孤立と生活不活発病（廃用症候群）が顕在化しつつあった。かつて、阪神・淡路大震災・中越地震後の避難所や仮設住宅でもこのことは大きな課題となった。筆者らは、その予防として高齢被災者が意欲を持ち何かに取り組むことで、身体と心が本来のはたらきを取り戻すと考え、それに有効な活動として楽しみながら身体を動かす「遊びリテーション」（三好春樹造語）と「造形」を組み合わせた「手づくり遊びの会」というワークショップを継続的に行ってきた。本稿は仮設住宅における高齢者の孤立と生活不活発病はもとより、そのコミュニティへの「ケア」を紹介するものである。手や身体を使って、自分の作品を完成させることの喜び、仲間との約束事やハレの場でプレイヤーとなること、覚えた技を人に教えることなどが意欲の創出につながり、小さな事からプラスに向かう循環をつくる継続的な場づくりが、被災者のコミュニティならずとも、今後の高齢社会に不可欠な相互扶助のコミュニティに求められる。

キーワード: 仮設住宅、独居高齢者、孤立、生活不活発病、造形、遊びリテーション、ICF

１．はじめに

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災により千葉県旭市の一部が津波と液状化の被害を受けた。その被災状況は死者 13 名、行方不明者 2 名、家屋の全壊 336 棟、大規模半壊 434 棟、半壊 509 棟、一部損壊 2439 棟、床上浸水 677 棟、床下浸水 277 棟、液状化 771 棟であった（平成 23 年 6 月 30 日、旭市発表）。この被災地における避難所及び応急仮設住宅（旭地区 50 世帯・飯岡地区 150 世帯、うち独居高齢者 20 世帯）で筆者らと学生は、「心のケア」に関するボランティア活動を 45 回（平成 24 年 11 月現在）実践している。

写真 1　県道 30 号（九十九里ビーチライン）

写真 2　津波被害にあった家屋の瓦礫

長年にわたり介護福祉士として高齢者と接してきた筆者松下は、災害から3週間後の石巻の避難所で高齢者の廃用症候群発症の兆候を見た。被災前には住み慣れた我が家で、身体が不自由であろうともそれなりに各自のペースで自力生活を営んでいた高齢者が、慣れない小学校体育館の応急避難所でようやく畳2畳ほどの個別スペースを確保したものの、三度の食事を支給され、日課を失い、コミュニケーションの相手を失い、それに加えて援助者の過剰な善意のために活動しなくなるという生活状態になっていた。そうした生活不活発な状態から、使わない機能が衰える生活不活発病（廃用症候群）が顕在化しつつあった。かつて、阪神・淡路大震災（平成7年1月17日）や中越地震（平成16年10月23日）後の避難所や仮設住宅でもこのことは大きな課題となった。

本学の所在する千葉県においても、旭市・香取市・山武市・浦安市などが被災している。中でも旭市は、東北地方太平洋沿岸に比べれば規模は小さいものの、同様に津波によりこれまでの生活を失った人が多く、避難所や仮設住宅等での生活を強いられている。筆者らは、それぞれの専門的視点から近隣被災地に於ける地域貢献を考えた。生活不活発病予防として高齢被災者が自発的に動くことが重要だと考えた。意欲を持ち何かに取り組むことで、身体と心が本来のはたらきを取り戻すと考え、それに有効な活動として楽しみながら身体を動かす「遊びリテーション」（三好春樹造語）と筆者森の専門分野である「造形」を組み合わせて、被災者同士が集い、時と場を共有する実践活動を行った。

この論文は被災後の平成23年4月の避難所から始まり､5月仮設住宅入居以降1ヶ月に2回のペースで継続して行っている「手づくりあそびの会」（被災地での遊びリテーションと造形、また本学学生らによる世代間交流）の活動報告と特に仮設住宅独居高齢者の「心のケア」効果の検証を記載する。筆者らのそれぞれの専門分野から松下が「国際生活機能分類（ICF）の視点」、森が「造形表現による効果の視点」から本活動を考察していく。

２．被災者ボランティア活動の目的と概要

被災地における遊びリテーション、造形活動及び学生と被災者との交流活動についての概要は時系列に段階を追って述べていく。その理由は、被災直後から現在まで1年数ヶ月の時間が経過してきた中、被災者の置かれている生活状況、ニーズも刻々と変化しており、その時々の被災者の状況や希望に応じた活動を計画実行し、そしてまた内容を修正し、試行錯誤しながら活動を行ってきた経過が読み取れるからである。（資料1－活動経過表参照）

２．１．被災後避難所段階

被災から6週間が経過した4月22日に避難所での活動を学生とともに開始した。避難所は旭市飯岡保健福祉センターに設置され、居住スペースはその多目的ホールにある。多目的ホールにはブルーシートが敷かれ、家族ごと三畳程の広さに90ｃｍ程の高さの板で仕切られている。衣食は最低限支援物資等により充足している状況であった。活動は多目的ホール前の廊下で行った。活動内容は毛糸で人形を作るというものである。活動目的は高齢者の生活不活発防止である。自発的に活動する動機と

してマスコット人形（ポンポン人形）を被災者に制作してもらい、それをバザーなどで販売することで生活意欲に繋がらないかと考えた。

写真３　多目的ホールの廊下にて

写真４　マスコット人形、
通称「ポンポン人形」

２．２．仮設住宅・生活適応段階

5 月中旬に仮設住宅が完成し避難所、親類宅、旅館等から被災者が移転した。この地区は海岸沿いに細長く津波の被害を受け、また沿岸以外にも液状化の被害を受けている。そのため仮設住宅の隣人が同町内の顔見知りではない状況であった。避難所から仮設住宅への移転は個人のプライバシーが確保できるという圧倒的なメリットを持った。しかしそれは同時に独居高齢者が外側から見えにくくなったことを意味する。孤独死に至らないためにも高齢者が室内に閉じこもらないことが肝要となる。仮設住宅の開設当初はプレハブ住宅の殺伐とした景観であったことから、本学環境社会学部の温室で福祉総合学部の学生が水やりをして育てた苗と企業から寄付されたプランターの配布を行った。毎日の植物への水やりで住宅の外に出る事により、日課作りによる体力維持と近隣との交流を目的とした。

写真５　殺風景な完成間際の仮設住宅

写真６　植物の苗の配布

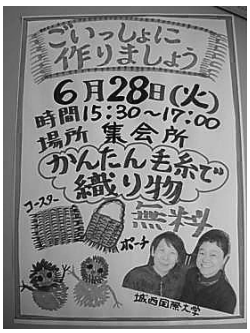


写真７　「手づくり遊びの会」
のポスター

２．３．仮設住宅内人間関係形成段階

仮設住宅入居 3 ヶ月が経過した 7 月頃になると生活のリズムが平常を取り戻してきたことが夕食の支度の匂いからも推察された。夕涼みに路地に出て立ち話も垣間みられる。配布した植物が根付き育ち始めた頃から、より多くの人間関係が結ばれるきっかけになることを目的に造形活動として絵手紙、手芸などと遊びリテーション活動を実施した。手芸では針の糸通しのために学生が活躍し、高齢者に

とって孫世代の学生との交流が持たれた。参加者の中でもボランティアの筆者らから作り方などを教えられるだけではなく、参加者どうしが教え合うという関係性が見え始めた。次回案内チラシを各戸に配布する際には、できる限り声掛けをしながら、顔を覚えてもらい、ボランティア側である筆者らとの信頼関係を結ぶことにも留意した。

写真８　花が咲いて個性が出た玄関先

写真９　「手づくり遊びの会」風景

写真 10　緑のカーテンに育ったゴウヤ

２．４．仮設住宅内コミュニティ形成段階

仮設住宅入居後半年が経過する頃には独居高齢者エリアから８名程の参加が定着した（飯岡地区仮設住宅）。お互いが交流を深め、行き来している様子が見受けられる。この輪を広げることを模索した。そのために学生の手話コーラスのレクチャーや茶話会などを取り入れた。それと同時に、被災者として物品やサービスを施されることのみに充足感を持つのではなく、他者に施すことを目的にすることで生活意欲が高まることに着目した。本学大学祭にて、紙トンボ作りを子どもたちに教え、手作り毛糸人形にメッセージを添えて子どもたちにプレゼントするなどの活動を行った。

写真 11　大学祭での活動風景

写真 12　学生の手話コーラスレクチャー

写真 13　皆で手話の練習

２．５．年越し段階

震災の年から新年を迎えるに当たり、節目として気持ちを新たに持てるような活動になることを目的とした。内容は正月飾りとして扇に文字を書く、達磨に文字を書く等の作品制作を行った。被災者どうしが互いの気持ちを発表し、またそこに学生が立ち会うことで、その場の皆が承認することになり、被災を乗り越え未来に向けて抱く気持ちを共有する場となった。

写真 14　思いを文字に表した正月飾りの扇

写真 15　玄関に飾られた扇

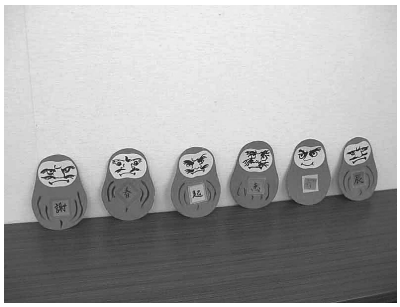


写真 16　達磨にも思いを文字に

２．６．仮設住宅外活動への働きかけ段階

年が明けて独居高齢者エリアの住民は互いの生活を支え合う関係を結んでいる様子である。そこで仮設住宅外への働きかけを積極的に試みた。目的は住民同士の結束力の強化と他者に待たれる存在であることの自覚から生きる意欲を見出してもらうことである。福島県いわき市の仮設住宅へのボランティア訪問、千葉県長生郡睦沢町「デイサービスこだま」に於ける軍手人形劇の発表を実施した。人形劇では仮設住宅の生活の困難さ、苦労、またこれまでの暮らしの中で感動したことなどを人形に託して語るものとなった。

写真 17　いわき市の仮設住宅の方々とポンポン人形をつくる

写真 18
チームを組んで「鳥のダンス」を披露

写真 19　「デイサービスこだま」で軍手人形劇を披露

２．７．地域コミュニティへの働きかけ段階

仮設住宅退去期限が 1 年延長（※後述）され 3 年となったが、当初 2 年間という期限が示されていた事から、入居後 1 年を過ぎた頃から退去への動きが活発になってきた。

公営住宅へ転居する人、元の土地や他の土地に家を新築して移って行く人、さまざまである。しかし、そこでの生活が震災前と同じとは限らない。安堵感からか、再建した自宅に戻って 2 ヶ月後に亡くなった人もいる。独居高齢者の場合は、仮設住宅の生活よりも他者の目が行き届かなくなる。地域コミュニティ強化のため、防災や共助の意識を働きかけることを目的とし、出前公演や「災害時の介護」研修を開催した。

※厚生労働省、平成 24 年 4 月 17 日付け社援総発 0417 第 1 号各都道府県災害救助担当主管部(局)長あて「東日本大震災に係る応急仮設住宅の供与期間の延長について」の通知を受け、千葉県に対し、旭市、香取市及び山武市から応急仮設住宅の供与期間の延長についての要望が出されたため、平成 24 年 6 月 15 日千葉県は応急仮設住宅の供与期間を 1 年延長し、退去期限を平成 26 年 5 月とする旨発表した。

２．８．生活再建・仮設住宅退去段階

生活再建による仮設住宅退去者が多くなり、互いに助け合い生活を共にしてきた近隣の付き合いが離散していかざるを得ない段階となった。それぞれの生活再建の格差が小さな事柄にも摩擦を生む状況にある。そうした中で、心のケアとしての本活動がどのような役割を担うのか見極めなければならない。その役割は、仮設住宅を退去しても「いつでも立ち寄れる場」「忘れてはならない震災を語り継ぐ活動拠点」ではないかと考える。

資料 1＜活動実績＞

	回数	月　日	活　動　内　容	ボランティア	住民参加人数	備　考
（1）被災後避難所段階		平成 23 年 4 月　1 日	現地視察及び避難所訪問 （飯岡小学校・ 飯岡保健福祉センター）	松下 介護福祉士会2名		
	1 回	4 月 22 日	マスコット（ポンポン人形）づくり （飯岡保健福祉センター避難所）	松下・森 学生 3 名	15 名	
	2 回	4 月 26 日	マスコット（ポンポン人形）づくり （飯岡保健福祉センター避難所）	松下・森	9 名	
	3 回	5 月 31 日	視察及び今後の活動について相談 （飯岡・旭仮設住宅、旭市役所）	松下・森		
		6 月　8 日	「ボランティア活動願い」郵送 （旭市役所保険年金課　担当者宛）	松下		
（2）仮設住宅・生活適応段階		6 月 17 日	本学イネーブルガーデンで朝顔の種まき （環境社会学部高橋教授指導）	松下 学生 4 名		
	4 回	6 月 21 日	案内チラシ配り （飯岡仮設住宅・旭市役所）	松下・森		
	5 回	6 月 28 日	小物作り（飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森	5 名	
	6 回	7 月　1 日	朝顔・風船かずらの苗配布 （飯岡仮設住宅）	松下・森 学生 2 名		映像フィルム保存に関する相談
	7 回	7 月 12 日	小物作り （旭仮設住宅集会所） 植物の苗配布・案内チラシ配り （飯岡仮設住宅）	松下・森 学生 2 名	7 名	映像フィルム 9 本を預かる メディア情報学部に保存の相談

	回数	月　　日	活　　動　　内　　容	ボランティア	住民参加人数	備　考
（3）仮設住宅内　人間関係形成段階	8回	7月26日	小物作り・絵手紙 （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森	6名	民間業者の見積、1本15,750円
	9回	8月　9日	小物作り・植物苗配布 （旭仮設住宅集会所） 植物苗配布・案内チラシ配り （飯岡仮設住宅）	松下・友田 学生2名	3名	別業者の見積（1本5000円）を伝え、8本返却。HOXに依頼、8/28完成。
	10回	8月30日	遊びリテーション （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・友田 学生3名 介護福祉士会2名	6名	洗浄済みフィルム返却
	11回	9月13日	絵手紙 （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下・森 介護福祉士会2名 アドバイザー	5名	
（4）仮設住宅内コミュニティ形成段階	12回	9月27日	ベビィドレスタオル作り （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森 学生2名 介護福祉士会2名	9名	
	13回	10月11日	手さげ袋作り① （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下・森・講師 学生1名 介護福祉士会2名	5名	
	14回	11月1日	紙トンボ・ポンポン人形・大学祭参加打合せ（飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森 学生2名 アドバイザー2名	9名	
	15回	11月5日	城西国際大学・大学祭に参加協力 （飯岡仮設住宅の皆さん）	松下・森 学生6名 海匝ネット2名	5名	
	16回	11月7日	手さげ袋作り② （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下・森・講師 管理人 介護福祉士会2名	8名	
	17回	11月22日	茶話会と手話コーラス・手話講座 （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森・友田 学生3名 アドバイザー	13名	

	回数	月　日	活　動　内　容	ボランティア	住民参加人数	備　考
（5）年越し段階	18回	12月6日	クリスマスリース作り （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下 介護福祉士会2名 アドバイザー	6名	
	19回	12月27日	お正月飾り（一文字扇） （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森 学生2名 アドバイザー	9名	千葉テレビ取材 2名
	20回	平成24年 1月10日	縁起だるま作り （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下・中村 児童相談員	4名	
	21回	1月24日	バンダナ巾着作り （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森 アドバイザー	7名	
	22回	2月7日	ちょい編み襟巻き作り （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下・学生3名 アドバイザー 児童相談員	6名	
（6）仮設住宅外活動への働きかけ段階	23回	2月14日	いわき仮設住宅ボランティア準備 操り鳥製作・操作練習 （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森 アドバイザー2名	11名	
	24回	2月23日	いわき市仮設住宅訪問 （中央台高久第一応急仮設住宅） 飯岡仮設住人7名	松下・森・友田 県社協職員1名 本学卒業生1名 アドバイザー2名	30名	千葉テレビ取材 3名同行
	25回	3月13日	バンダナ巾着作り （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下 アドバイザー 児童相談員	7名	千葉日報記者取材
	26回	3月27日	刺し子ハンカチ （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森・ 講師1名 アドバイザー3名	17名	
	27回	4月10日	ベビィドレスタオル作り （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下・森 アドバイザー	4名	
	28回	4月24日	パッチワーク手提げバッグ作り① （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森 学生2名 講師・助手	16名	
	29回	5月15日	ビニール袋の雨合羽作り （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下・森 学生1名 アドバイザー	2名	環境社会学部より 多肉植物寄せ植え 寄付
	30回	5月22日	パッチワーク手提げバック作り② （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・ 学生2名 講師・助手	14名	
	31回	5月26日	古民家デイサービスこだま・出前公演 軍手人形劇「仮設住宅の暮らし」 （長生郡睦沢町北山田）	松下・森・友田 県社協職員1名 飯岡仮設住人4名	5名	千葉テレビ取材 3名同行

	回数	月　日	活　動　内　容	ボランティア	住民参加人数	備　考
（7）地域コミュニティへの働きかけ段階	32 回	6 月 12 日	ストッキングのハタキ作り （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下・森 アドバイザー	3 名	
	33 回	6 月 26 日	パッチワーク手提げバック作り③ （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森 講師・助手	14 名	
	34 回	7 月 10 日	フラワートイレットペーパー作り （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下 アドバイザー	3 名	
	35 回	7 月 24 日	暑中見舞い葉書作り （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森 小学生 1 名	9 名	
	36 回	8 月　2 日	東金特別支援学校生徒との交流 （飯岡仮設住宅集会所） 高等部生徒 6 名＋先生 7 名	松下	6 名	特別支援学校「防災教育チャレンジプラン」の一環
	37 回	8 月　7 日	小学生と遊ぼう！ （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下 小学生 2 名 アドバイザー	3 名	
	38 回	8 月 28 日	イモ虫のストラップ・カード作り （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・中村 アドバイザー ユーアイやちよ 9 名	17 名	
	39 回	9 月 3 日	ホットケーキ作り （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下・森・管理人 アドバイザー 県社協職員 3 名	3 名	
（8）生活再建・仮設住宅退去段階	40 回	9 月 24 日	ビニール袋の雨合羽作り （飯岡仮設住宅集会所） 海匝ネット訪問 案内チラシ配り（旭仮設住宅）	松下・森	11 名	
	41 回	10 月 1 日	いも煮会・カラオケ （旭仮設住宅集会所） 市役所 案内チラシ配り（飯岡仮設住宅）	松下 アドバイザー 介護福祉士会2名	3 名	
	42 回	10 月 22 日	ふれあいサロン村上・出前公演 「あの震災から 1 年半」 （八千代市村上団地集会所）	松下・森・友田 アドバイザー2名 飯岡仮設住人4名	30 名	千葉テレビ取材 3 名同行
	43 回	10 月 23 日	お琴の調べと共に唄おう （飯岡仮設住宅集会所） 案内チラシ配布（旭仮設住宅）	松下 協力員 3 名 楽々メンバー6名	9 名	

	回数	月　　日	活　　動　　内　　容	ボランティア	住民参加人数	備　考
	44 回	11 月 6 日	房総の花寿司つくり （旭仮設住宅集会所） 案内チラシ配布（飯岡仮設住宅）	松下・森・講師 アドバイザー	3 名	
	45 回	11 月 17 日 18 日	「災害時の介護」研修 （いいおかユートピアセンター）	松下・森・友田 海匝ネット所長 介護福祉士会6名	19 名 11 名	

３．国際生活機能分類（ＩＣＦ）の視点から被災高齢者の心のケアに関する考察

３．１．心のケアとは

ケア（care）に関する定義は必ずしも明確にはなされていないのが現状であるが、広井良典（1997）は、英語のケア（care）という言葉について、狭くは「看護」や「介護」、中間的には「世話」、広くは「配慮」「関心」「気遣い」という広範な意味を持つと述べている。また、三井さよ（2004）は身近な人々であれ、見知らぬ人々であれ、職業的に関わるクライアントであれ、自らの関わる他者の『生』を支えようとする働きかけをケアというとしている。同様に、心のケアの定義についても明確な定義はないが、藤森立男（2012）の定義する「心のケアとは相互関係に基づいて、人生の苦難や災難に直面する人々の心理的苦痛や不安などを和らげ、病気の予防や回復、肯定的な人生の再建などを支援することである」(「復興と支援の災害心理学」p13）という概念に準拠して、本論文では大震災（2011. 3.11）から 1 年 9 ヶ月にわたる筆者らの活動を被災者の「心のケア」と位置付ける。

筆者松下は、「人が生きること」「生きることの困難（障害）をどう乗り越えていくか」の支援について、森および学生とともに行ってきた「手づくりあそびの会」の活動を振り返り、ICF（International Classification of Functioning，Disability and Health：国際生活機能分類）の視点から考察する。

３．２．ＩＣＦモデルの考え方

ICF（国際生活機能分類）とは、2001 年 5 月の WHO（世界保健機関）の総会で採択された国際的な障害に関する分類法である。正式名称は「生活機能・障害・健康の国際分類（International Classification of Functioning，Disability and Health)」であるが、頭文字をとって ICF と呼び、日本語訳でも「国際生活機能分類」と呼ぶ。

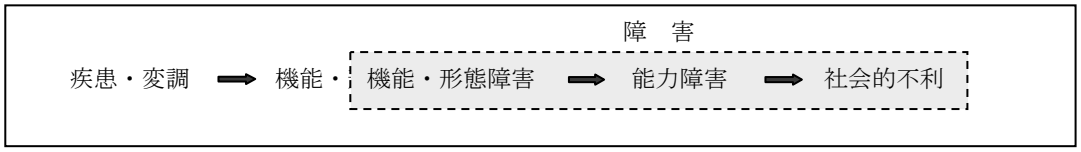
それまでの障害観は、1980 年の ICIDH（International Classification of Impairments，Disability and Handicaps：国際障害者分類)「機能障害・能力障害・社会的不利の国際分類」であった。ICIDH の基本理念は、国連の国際障害者年（1981）の世界行動計画にその基本概念が採用され、障害者運動を含め障害関連の事業に大きな影響を与えた。しかし、その後種々の問題点が指摘され、日本を含む

広く世界各国の専門家と障害当事者との協力によって８年の歳月をかけて改定作業が行われ、その改定版として採用されたのが ICF（国際生活機能分類）である。それぞれのモデルの特徴は次に記述する通りである。

３．２．１．ＩＣＩＤＨ（国際障害分類）モデルの特徴

ICIDH のモデル（図１参照）は、病気・けがなどの「疾患・変調」から「機能・形態障害」、「能力障害」、「社会的不利」が生じるというものである。そして、「機能・形態障害」「能力障害」「社会的不利」を合わせたもの全体が障害であるとし、障害にはこの３つのレベルがあるという理論である。「社会的不利」（Handicaps）も含めて障害を３つのレベルからなるものとしたとらえ方は、画期的な広い見方であった。

図１　ICIDH（国際障害分類）モデル



出典：上田敏著「ICF の理解と活用」p9 図１を一部改編

しかし、ICIDH については発表直後から、次のような批判や誤解が生じた。

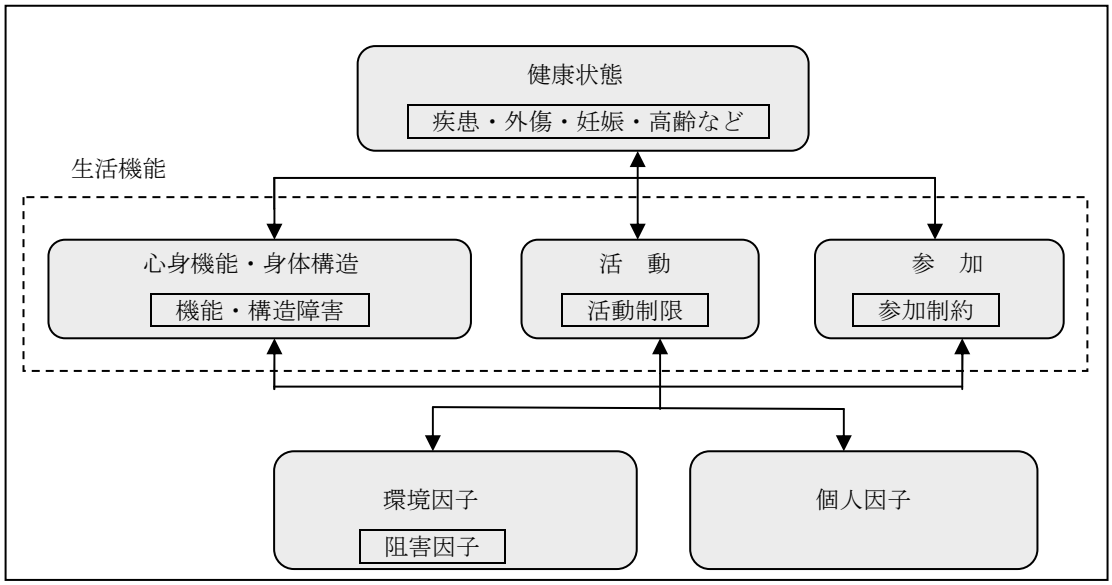
① 矢印が運命論的であるという批判
② 矢印が時間的順序を示すものという誤解
③ マイナス面だけを見ており、偏っているという批判
④ 障害の発生に影響する環境が考慮されていないという批判
⑤ 社会的不利の分類が他の分類に比べて少なく、不備であるという批判
⑥ 研究者のみで作成し、障害のある人自身の参加がなかったという批判
⑦ 欧米の文化を前提として作られているという批判
⑧ 主観的障害の理解が重要にもかかわらず、客観的障害のみという批判
⑨ 疾患から直接起こる社会的不利もあるという批判

以上のような批判を受けて、2001 年に ICIDH の改定版として ICF が登場した。

３．２．２．ＩＣＦ（国際生活機能分類）モデルの特徴

ICF モデルの基本的特徴は次のとおりである。

図２　ＩＣＦ（国際生活機能分類）モデル



出典：新介護福祉士養成講座「介護の基本Ⅰ」ｐ151　図 4－1 を一部改編

①　「生活機能」は生命・生活・人生を包括する

生活機能とは、「人が生きること」の全体を示すもので、「心身機能・身体構造」（生命レベル）、「活動」（生活レベル）、「参加」（人生レベル）の各構成要素は生活機能の 3 つのレベルを示している。この 3 つのレベルで、人が生きるということを総合的にとらえるという考え方である。

②　プラスを重視する考え方

ICIDH は「障害」というマイナス面だけに注目していたが、ICF は「生活機能」というプラス面に注目する点で、考え方の 180 度転換である。つまり、それぞれのレベルで、プラスを前提として、そこに問題が生じた状態（マイナス）をみる、すなわち「マイナス（障害）をプラス（生活機能）の中に位置づけてみる」（図 2 参照）という考え方である。言いかえれば、「大きなプラスの中に小さなマイナスがある」という画期的な考え方を示した。

③　相互作用モデルである

ICIDH では一方向であった矢印が、ICF では図 2 で示すとおり、ほとんどすべての要素が双方向の矢印で結ばれている。つまり各要素が相互に影響を与えあう「相互作用モデル」であるとした。すべてがすべてと影響しあっているため、良循環にもなれば悪循環にもなるということが分かる。前述したように、被災高齢者の生活は生活不活発の悪循環に陥りやすい。「相互作用モデル」の考え方は、筆者らの活動の主軸に置いた考え方である。

④　背景因子を重要視する考え方

ICF のさらに大きな特徴は、生活機能に大きな影響を与えるものとして「背景因子」を導入したことである。「背景因子」は「環境因子」と「個人因子」に分けられる。「環境因子」は物的な

環境だけではなく、人的な環境、社会意識としての環境、制度的な環境をも含んでとらえる。また、「個人因子」はその人固有の特徴をいう。「個人因子」は多様であるため、分類は将来の課題とされ、例として年齢、性別、民族、生活歴（職業歴、学歴、家族歴、等々）、価値観、ライフスタイル、コーピング・ストラテジー（困難に対し解決する方法・方針）などがあげられている。

⑤広い概念として健康状態をとらえる

「障害」（生活機能低下）を起こす原因は、ICIDH では疾患・変調（病気やけが、その他の異常）とされていたが、ICF ではその他に妊娠・高齢（加齢）・ストレス状態その他いろいろなものを含む健康状態という広い概念とした。このことからも、ICF が単なる「障害（生活機能低下）の分類」ではなく、「全ての人の生きることの分類」であって、人が生きることを総合的にとらえる「生活支援モデル」であると言える。

⑥「活動」を「能力」と「実行状況」でとらえる

生活機能の「活動」を「能力」（できる活動）と「実行状況」（している活動）の 2 つの側面からとらえている。「している活動」は、現在の生活で実際に行っている「活動」（生活行為）である。「できる活動」には 2 種類あって、1 つは機会がなく現在はしていないが、「機会さえあればできる（能力のある）活動」であるのに対して、もう 1 つは専門家が技術・経験・知識を駆使し、補助具なども用いて「働きかけてはじめてできる（本人さえ気づいていないような潜在的な能力のある）活動」である。系統だった働きかけによって「できる活動」を「している活動」にしていくことが可能になる。この考え方も筆者らが今回の活動において、重要視した点である。

以上のような特徴をもった ICF（国際生活機能分類）は、ローマ字（各構成要素）と数字（大分類・中分類・小分類）によってコード化されている。しかし、今回はその分類に直接言及するのではなく、「全ての人の生きることの分類」である ICF の考え方に基づき、被災者の生活状況をアセスメントし、「造形」「遊びリテーション」「学生との交流」等の活動を取り入れて実践した被災高齢者の心のケアに関する支援活動を振り返り、その効果を以下に考察する。

３．３．被災者心理の経時的変化

支援者は、被災者の心理が時を経て変化して行くことを理解して支援しなければならない。災害後の生活復興とあわせて心の立ち直りの速度は、災害の種類や規模、また人によって大きく異なる。そうした個人差があるにもかかわらず、多数の被災者がよく似た段階を経過していくことを多くの研究者が論じている。ここでは、デビッド・ロモ（David Lujan Romo）の「被災者とコミュニティの回復プロセス」を引用するが、筆者らは支援の実践活動のなかで、まさに表 1 に書かれている被災者心理の経時的変化を目の当たりにした。そうした変化に対して、その都度、状態把握・課題分析しながら、本論文「２．被災者ボランティア活動の目的と概要」の実践を継続してきた。

表１　被災者とコミュニティの回復プロセス

英雄期 災害直後	自分や家族・近隣の人々の命や財産を守るために、危険をかえりみず、勇気ある行動をとる。
ハネムーン期 1 週間～6 ヵ月間	劇的な災害の体験を共有し、くぐり抜けてきたことで、被災者同士が強い連帯感で結ばれる。援助に希望を託しつつ、瓦礫や残骸を片づけ、助け合う。被災地全体があたたかいムードに包まれる。
幻滅期 2 ヶ月～1、2 年間	被災者の忍耐が限界に達し、援助の遅れや行政の失策への不満が噴出。人々はやり場のない怒りにかられ、けんかなどのトラブルも起こりやすい。飲酒問題も出現する。被災者は自分の生活の再建と個人的な問題の解決に追われるため、地域の連帯や共感が失われる。
再建期 数年間	被災地に「日常」が戻り始め、被災者も生活の建て直しへの勇気を得る。地域づくりに積極的に参加することで、自分への自信が増してくる。ただし、復興から取り残されたり、精神的支えを失った人には、ストレスの多い生活が続く。

出典：デビッド・ロモ著「災害と心のケア」p－14

３．４．旭市における実践活動の検証･･･生活不活発の悪循環→良循環へ

避難所･仮設住宅に生活する被災高齢者は殊に生活機能低下の悪循環に陥りやすい。旭市において、こうした過去の大震災後と同様の高齢者の生活機能低下や孤独死などの発生を防ぐために、どのような支援（かかわり）が適切なのかを考える際に、筆者らは学生と共に前述した ICF の考え方をベースに置いて、アセスメント・支援計画・実施・評価のサイクルで試行錯誤しながら取り組んできた。そのプロセスは、以下のとおりである。

３．４．１．アセスメント

実際には、「2. 被災者ボランティア活動の目的と概要」に分類した（1）被災後避難所段階～（8）生活再建･仮設住宅退去段階の各段階ごとに、直接のかかわり場面や仮設住宅生活支援アドバイザーからの情報などをもとに生活状況を把握した。表 2 は、仮設住宅に生活する独居高齢者の仮設住宅入居後 1 年位までの生活状況について、ICF の構成要素を区分として整理したものである。マイナスの側面について見てみると、それぞれが全ての区分で影響しあっていることが読み取れる。

表２　仮設住宅に生活する独居高齢者の生活状況（入居～1 年位まで）

区　分	マイナスの側面	プラスの側面（ストレングス）
健康状態	・生活習慣病等の持病 ・様々なストレス状態	・服薬管理ができる
心身機能	・生きる意欲の喪失または減少 ・活動量減少によるさまざまな機能低下	・目的があれば努力する意思がある
身体構造	・生活環境による膝・腰の痛みの出現・増強 ・布団の上げ下げによる肩の痛み ・狭さによる転倒、打撲等	・悪化させないため、リハビリの意思がある

区　分	マイナスの側面	プラスの側面（ストレングス）
活　　動	・これまでの日課が断たれた状態 ・役割の喪失・減少による活動量低下 ・土地勘や移動手段がないため行動量低下	・役割があれば誠実に取り組む ・移動手段があれば動く意思がある
参　　加	・趣味活動の中断 ・なじみの関係がないため、自室にこもる ・被災前のコミュニティでの役割の喪失	・誘われれば参加する意思がある ・趣味や特技がある
環境因子	・仮設住宅の狭さ、質の悪さ ・居住地域の不便さ ・行政の対応の遅れや手続きの煩雑さ ・ボランティアの偏り（コーディネイト不足）	・一人暮らしを継続する意思が強固 ・現状を受け入れ、順応しようとする気持ちがある
個人因子	・家族の被災や被災による家族の喪失など ・家族と同居できない事情（価値観等）	・自己選択、自己決定できる ・他者の役に立つことを望んでいる

この状況を解釈・関連づけ・統合化すると、以下のような課題（波線㋐～㋔）が抽出された。

表３　課題の抽出

状況の解釈と整理	関連づけ・統合化による課題の抽出
①救援物資等の配布されたものはあっても、これまで愛用した生活物資や、生活史の刻まれた固有のものがない。 ②趣味の活動など、目的を持って行動し、成し遂げるという達成感が得られていない。 ③特技を発揮するなどの、役割がない。	①②③⑤ 目的やコミュニケーションの不足により、生きる意欲の低下を招く恐れがあり、ますます生活が不活発になることが考えられる。 ↓ ㋐達成感・充実感・存在感などを得て、生きる意欲の低下を防止する必要がある。 ㋑仲間づくりとその人らしい役割が発揮できる場が必要である。
④これまで長年培ってきた固有の日課がない。併せて、居住環境や居住地域の不便さから、日常生活活動の量と質の低下がみられる。 ⑤近隣住民がなじみの関係ではないため、コミュニケーションが不足している。	②⑤⑥⑦ 共通の話題や楽しみ・喜びを共有する機会がなく、孤立する恐れがある。 ↓ ㋒共通の話題や楽しみ・喜びを共有する機会が必要である。 ㋓世代間交流などにより慈愛感を呼び戻すなど、心やすらぐ場が必要である。
⑥ボランティアは来るが､系統性や継続性がなく、また常に｢してもらう｣立場に置かれる。 ⑦世代間の交流の機会が少ない。	④⑤⑦ 活動量が減少していることから、日常生活動作能力等の機能低下が考えられる。 ↓ ㋔他者と共に、楽しく身体を動かす機会が必要である。

３．４．２．支援の実践とその効果

表３で抽出した課題の解決に向けて、筆者らはそれぞれ次のような支援を実践した。

＜課題＞

㋐　達成感・充実感・存在感などを得て、生きる意欲の低下を防止する必要がある。

㋑　仲間づくりとその人らしい役割が発揮できる場が必要である。

＜支援活動＞　　資料１参照

＊造形（ものづくり）

＊被災者による被災地ボランティア・軍手人形劇の出前公演

＜効果＞

＊活動の成果として、それぞれ自分独自の個性豊かな作品が完成することにより、自分の所有物が１つずつ増えていくことの達成感や満足感が得られた。

＊これまで本人も気づいていなかった潜在能力の発見につながった。

＊制作過程や次回までの宿題において、教え合うなど互いの助け合いや役割感・連帯感が醸成された。

＊制作の過程で互いに作品を称賛し合うなど、自己の存在感の確認、参加者同士のコミュニケーションや仲間づくりにつながった。

＊福島県の仮設住宅ボランティアや県内のディサービスなどへの出前公演に参加することによって、「施される」立場から、多くの高齢者が本来持っている「施す」立場を実践し、生きがいや役割の再確認・生きる意欲の向上が見られた。

＜課題＞

㋒　共通の話題や楽しみ・喜びを共有する機会が必要である。

㋓　世代間交流などにより慈愛感を呼び戻すなど、心やすらぐ場が必要である。

＜支援活動＞　　資料１参照

＊ガーデニングの機会を提供

＊活動への学生の参加

＊本学大学祭への協力依頼

＜効果＞

＊グリーンカーテン（風船かずら）の成長や朝顔の花の数などを話題として、コミュニケーションが活発となり、楽しみや喜びを共有するシーンが見られた。

＊孫世代にあたる学生の支援を得て遊びリテーションやもの作りをすることは、参加者の心安らぐ場となった。

＊依頼された大学祭への協力をすることで、役割を実践できたことが自信につながり、気持ちが仮設住宅の外に向かう変化につながった。

＜課題＞

㋔　他者と共に、楽しく身体を動かす機会が必要である。

＜支援活動＞　　資料１参照

＊遊びリテーション

＊手話コーラス

＜効果＞

＊音楽に合わせたり、ゲーム感覚で楽しみながら身体を動かすことによって、リラクゼーション効果や関節・筋力のリハビリテーション効果が得られた。

＊カラオケで唄を歌うことにより、心肺機能や嚥下機能の維持が図られた。

＊仲間づくりが促進され、毎日一緒にウォーキングするグループができた。

＊新聞・広告・ひも・空き缶など、身の回りにあるものを用いて行うため、日常生活やグループ活動に取り入れることができる。

＊学生から習った簡単な手話を、シニアサインとして活用できる学びとなった。

以上を整理すると、「造形」「遊びリテーション」「世代間交流」などの定期的なかかわりを通して、被災高齢者の「活動（生活レベル）」に働きかけを行ったことによって、「できる活動」を「している活動」につなげることができ、それによって「参加（人生レベル）」の活性化が図られた（詳細：森洋子「4. 造形活動による被災高齢者のケアに関する試みの報告」参照）。このことは、被災後の生活不活発の「悪循環」を「良循環」に変えるきっかけになり、生活機能全般を活性化し、少しずつ心の立ち直りを促進したため、被災高齢者が「ケアを受ける立場」から生活復興に向かう「主体的な生活者」へという変化を生みだした。この一連の現象は、まさにICFの相互作用モデルの確認であった。そして、本活動でのかかわりは、被災高齢者の支援のみならず、日常のケアにおいても汎用できることを、筆者森および参加学生らと共に確認することができた。

３．５．今後の課題

東日本大震災から１年９ヶ月余を過ぎた現在に至るまで、さまざまな支援によって、旭市の仮設住宅における孤独死のニュースは聞かれていない。しかし、ニーズは刻々と変化している。現在は、表1「被災者とコミュニティの回復プロセス」に示す「幻滅期」から「再建期」への移行期にあたると考えられる。被災から時間が経つほどに、被災者の生活復興の格差が増大している。そうした中で、今後の支援の課題は大きく２つあげられる。１つは、生活復興が進まない被災者の「取り残され感」と「孤立無援感」によるうつ・ひきこもり・アルコール問題、２つは、仮設住宅を離れて地域に戻った被災高齢者の孤立の問題である。変化する課題に対する適宜・適切な支援を継続する必要性を強く感じている。

４．造形活動による被災高齢者の心のケアに関する試みの報告

４．１．被災高齢者に対する造形活動から観察された効果

被災地における「手づくり遊びの会」の目的は、第一に被災によって生活環境が一変し、行動範囲が極端に制限された高齢者の生活不活発病の防止であった。そのことを起点に活動を開始したが、時間の経過とともに生活環境、人間関係が変化し、活動へのニーズも変化した。活動内容もそれに対応できるように心がけてきた。居住期限付きの仮設住宅において被災の衝撃からの立ち直りと生活再建を強いられる被災者に対して造形活動ができる支援を模索した。正解のない、もの作りの持つ寛容な雰囲気は様々な枠組みを超えて人々に開放感を与えるのではないか、生活の基盤になる経済、医療、福祉の力とは別なところで被災者を元気付けることができるのではないかと考えた。造形活動によって被災者高齢者に対してどのような支援ができたのかを１年半余の活動をもとに考察する。

被災後（2011 年４月）から現在（2012 年 11 月）に至るまでの被災高齢者の状況変化に連動して活動効果の現れ方も推移してきたように思われる。それらを「2.被災者ボランティア活動の目的と概要」で記載した段階に沿って述べていく。

４．１．１．被災後避難所段階

＊関わりとしての造形行為

被災後６週目、７週目に避難所において毛糸の人形作りの活動を行った。当初、被災者と非被災者（ボランティア側）という立場の全く違う関係の中で、共通の空気を呼吸することは極めて困難に思われた。しかし、手を動かしひたすら物を作るという行為によって両者が一緒にその場に身を置くことができた。造形を共に行うという関わり方があることによって、被災者のつらい現実が第一義にならない空間となった。被災者が「被災者としての語り」をしなくてもよい場であった。ボランティアを「する側」と「される側」ではない、対等な関係での関わりができた。この造形による関係形成は現代美術作家である折元立身氏による高齢者施設での造形活動記録（「介護もアート」2003）でも顕著にその効果が紹介されている。

＊高齢者生活不活発病予防

活動は避難所の廊下で行った。活動目的は高齢者の生活不活発病予防であり、避難所のわずかな個別スペースでじっとしている高齢者に動いてもらうことであった。結果として複数の高齢者が居住スペースから歩いて廊下に出て、会話を交わし手作業を行うという身体的効果があった。

＊触覚による癒し

人は五感である種の感覚を呼び起こす。編み物などを趣味としてきた女性高齢者はフワフワした毛糸玉の触覚にかつての穏やかな日常の手の記憶を呼び起こしていた。異常な生活環境の中、かつての日常作業に没頭することで安らぎを感じているかのようであった。

＊自己確認

自分が制作した作品を見て自己の再確認ができた点に着目する。自分のものに囲まれることで人は自己確認をしていくものではないだろうか。家具、洋服、持ち物、化粧、すべて自分の選択で自分を形づくる。身の周りの「自分のもの」のほとんどを失った状況は、自分たるところを確認する上で、たいへん不安定ではないか。自分の好みで色を選び、自分の性格や癖がにじみ出る造形作品を作り出すことは自己を再認識するために必要なことではなかったか。それぞれ異なる表情に制作された人形を見てそこに自分の面影を見るようにして作品を持ち帰っていった。

＊贈与物としての役割

制作された人形が贈り物として他者に与えられていたことに着目する。複数の人々が他者にその人形を贈与していた。支援物資が配布され最低限の生活はできていた。しかし支援物資は自分専用のものではない。自作の人形は自分のものとして隣人に贈与されていた。それをもらった人が杖につけて歩いていた。また、「かわいい彼女ができたみたいだ」と制作者に謝辞を述べている光景も見受けられた。

避難所での人形作りの活動は 2 回実施した。当初作品をバザー等で販売してその利益を被災者に還元する目的も考え開始した造形活動であったが、以上のような経緯から参加者が一つ残らず持ち帰ったためその目的は的外れであったことが分かった。

４．１．２．仮設住宅・生活適応段階

＊場作り

活動の内容としては身近な材料で殺風景な仮設住宅の暮らしに潤いを持たせることができるものと考え、毛糸の織物コースター、絵手紙制作を行った。住民同士が互いに顔を知らない段階で「造形活動」に求められることは他者と集い、時間を共にする場作りであると考えた。造形は集合のきっかけとしての役割を担った。したがって内容は誰にでも作れる、上手下手の評価の与えにくいものである必要があった。住民同士が同じ場に身を置き、身を近づけ、息を合わせる関係を成立させることが活動の第一目的となった。作品を作る過程で一人が笑う、それにつられて、隣の人が笑い、その空気が全体に伝わる。そのやりとりの中で場の息づかいがいきいきしてくる。それがともに制作を行う「造形活動」にできたことだと考える。

＊承認の媒体としての造形作品

集会所に集合した参加者は被災の情況を語り合うことはこの段階でほとんどない。誰がどのような被災をしているのかをお互いに知ろうとしない。そのようなことよりも共に作品を愛でることに時間は使われた。互いの存在を承認し合うことの媒体として作品があるように思われた。

４．１．３．仮設住宅内人間関係形成段階

写真 20　絵手紙に挑戦する皆さん

写真 21
90 歳でなければ描けない独楽

写真 22　一発で玉が見事に乗った瞬間

＊生活不活発病予防への身体的効果

絵手紙の筆の持ち方は習字の場合とは異なる。筆の一番上の端を持って、腕全体を動かすようにする。筆者はわざわざ不自由な情況を作ることで、上手に描かねばならないという精神的縛りから解放されるという効果を考えたが、松下は高齢者の身体の可動域を大きくすると考える。本活動の身体的な効果を E さんの場合で観察すると、家で寝ている状態から半身を起こす、立つ、歩く（シルバーカーを押す)、畳の上を這って移動、壁に寄りかかり座る、上腕を動かし絵を描く（目による観察)。コマ（上）は E さんの作品である。この後、けん玉を絵のモチーフにしたことから、けん玉を行うことになったのだが、壁にもたれて立ち上がる、壁から背を離す、バランスをとってけん玉の技を披露する、笑うという目覚ましい効果が得られた。

仮設住宅には自宅のように自由になる庭や畑がない。また、震災前のように隣家や馴染みの商店への訪問もできないであろう。高齢者にとって家の外に用事がない状況で「造形活動」が用事になり、身体を動かす動機になりえる。

＊生活不活発病予防の精神的効果

日常の緊張から距離を置き、形と色に集中する活動時間は、終了後に再び日常に戻るのではあるが、英気を養うことになるのではないか。仮設住宅での暮らしは趣味や旅の時間を持つことを困難にしている。「造形活動」はそれの代替となるのではないだろうか。また、E さんの場合、けん玉のパフォーマンスに及んだが、これに集中し成功させたことにより皆の拍手喝采を受けた。「造形活動」から派生した行動で他者の承認を得、充実感を味わうことができた。

＊コミュニティ作りへの契機としての教え合い

使えて愛らしいものを制作したいという要望がでてきたことから「かわいいタオル掛け」を作る。

タオルを裁断して子どものドレスのような形に再び縫い合わせ、そのまま手拭きとして使用できる。

これは手順が複雑で一人の指導者では全員を指導することができなかった。そこに期せずして参加者の教え合いが起こった。作業方法を了解した人がまだできていない人の作業を指導する。あまり会話を交わした事がなかった関係に変化が起こった。これをきっかけに集会所から帰った後の居住エリアでも会話を交わす関係になる。挨拶だけの関係から会話の関係を作る事ができた。

４．１．４．仮設住宅内コミュニティ形成段階

写真 23　意気揚々と大学祭の準備

写真 24
子どもたちに指導する男性陣

写真 25　子どもたちに指導する女性陣

＊被災高齢者チームの形成

仮設住宅での生活が半年余り経過し、不自由ながらも仮設住宅の生活が日常として定着すると活動参加者の気持ちにも余裕が出てきたようである。5 名が本学大学祭への参加の呼びかけに応えた。大学祭に訪れる子どもたちへの毛糸人形配布と紙トンボ作りの指導ボランティアとしての参加である。

今までの「造形活動」は筆者らが準備した材料を筆者らの指導により参加者が制作する形が中心であった。しかしながら大学祭のための準備としての活動は様相が異なった。参加者である高齢者が自発的に制作作業を進行させた。作業進行に筆者らが指揮をとることは全くなかった。材料を分ける、配布する、流れ作業の手順を決める、分担を決めるなどがすべて参加者の中だけで行われた。今までの「指示を待つ人」ではなかった。小さい自治であるが、これこそがコミュニティの必要条件であろうと考える。他者へプレゼントするというテーマがあったからこそ創出されたチームワークであると考える。被災者は被災直後から「施される人」であった。けれどもこの変容を見て、「施す人」になることこそ心身の能力が発揮され、能動的に動くことができるのではないかと考えた。

４．１．５．年越し段階

写真 26　言葉を託した扇

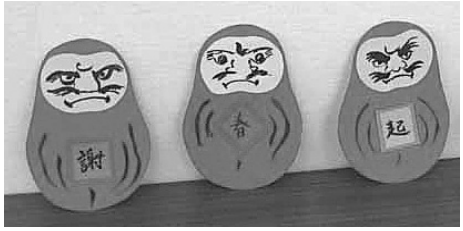


写真 27　作者の人柄が顔に出る達磨

＊決意の共有

被災の年が暮れようとする時期に正月飾りを制作した。飾りの中心に来年の抱負など好きな漢字一文字を加えてもらう。筆者らは被災していない者が被災者の心に安易に踏み込んではならないと感じ、被災者に改めて言葉を求めることはしてこなかった。しかし、この回は正月飾りの中に文字を入れることで、言葉にしてもらうことにした。文字を書く段になると皆考え込んだ。家族や家を亡くした人にやはり残酷な注文であったのか。時間はかかったものの全員が完成させ、それをホワイトボードに貼り出して発表会を行った。「絆」「辰」「夢」「山」それぞれがなぜその文字を選んだのかを述べた。「辰はお父さんが辰歳だから。もういないけど」「今年はなにもかも無になったけど、来年は夢を持っていく」どの言葉もたいへん重く響いた。参加者はお互いの出来栄えを褒め合い、ことばに聞き入り、大きな拍手を送り合った。思いを文字に託して書き、それを人前で発表し、互いの思いに立ち会うことで心の区切りとなり、決意の強化になったと松下は言う。実際に皆の表情からも苦痛ではなく、前向きな出来事であったことが見て取れた。このことから「造形活動」が日常とは別の深い次元に心を置くためのプロセスになることを知った。

４．１．６．仮設住宅外活動への働きかけ段階

写真 28,29　いわき市の仮設住宅を訪問し、手づくり人形の踊りを披露

写真 30　「こだま」で軍手人形劇の公演

＊被災高齢者の能動性の引き出し

2 月の福島県いわき市仮設住宅訪問を計画した。被災者がボランティアとして他の被災地を訪問する。造形指導と自作の操り人形で歌と踊りを披露するという企画である。この準備もたいへんいきいきと行われた。いわき市仮設住宅の住民は同じ被災者がボランティアとしてきたことに驚き、

また勇気が出たと感想を述べた。

４．１．７．地域コミュニティへの働きかけ段階

＊被災高齢者による活動効果の再現

いわき市の活動では、被災の苦労話が造形作業中に双方から語られた。手を動かしながらの雑談がかえって口を軽くしたようだ。同じ被災者同士といえども初対面では会話になりにくいという点を造形活動を介することで克服できたと思われる。ここでは筆者らがボランティアとして避難所で行った造形活動の効果であった「関わりとしての行為」「生活不活発病予防」「触覚による癒し」「自己確認」「贈与物としての役割」が被災高齢者チームによって別の被災地において再現された。

＊使命感の創出

5 月には千葉県長生郡のデイサービス施設において地域住民、介護職員を前に自作の人形劇で体験談を披露した。人形は軍手で作った。自作の人形に言葉を託すことで仮設住民の代表という役を演じたようであった。造形活動の毛糸人形作りの指導も被災高齢者が自ら行った。被災の体験を語る、人形の作り方を教えるという使命感が充実感に繋がっているように見受けられた。

４．１．８．生活再建・仮設住宅退去段階

＊孤独感の予防

震災から 1 年半余が経過し、仮設住宅独居高齢者エリアでは自宅再建が完了した人、仮設住宅から市営住宅へ入居を決めた人、子どもとの同居を選択する人とそれぞれの家庭や経済の事情に応じて退去する人が目立ってきた。激動の時間を共に過ごし育んできた仲間意識を壊したくないという配慮から、仮設住宅退去に関わる自宅再建状況や今後の暮らしの見通しは互いに語られない。ある日突然引っ越しが皆に告げられる。仮設住宅での信頼関係が深まった段階で離散していく。それぞれの行く先は住み慣れた環境ではない。移転であったり、同じ場所であっても近隣との間に元の関係が戻るとは限らない。自宅再建後こそ孤独になる可能性が高まる。すでに退去をした高齢者も、活動日には自転車や自家用車で参加をしてくる。本活動は仮設住宅を離れた人に対しても「集う場」になっている。

４．１．９．被災高齢者を対象とする造形活動効果のまとめ

本活動を時系列で振り返り、その効果を考察した結果、造形活動はそれぞれの段階で被災高齢者の表現したいことをビジュアル化し、五感を使う具体的な形に顕したことで被災高齢者の心のケアに貢献したと考える。

被災初期段階の高齢者は互いが知らない者同士の関係性の中、自分らしさのほとんどを剥ぎ取られた状況に置かれていた。そこに自ら好きな色、形を選び、自分らしさが滲み出る作品を作ることによって、その人らしさを可視化したと言える。またそこに作品があることで何もないところには生まれ得ない互いの承認が発現したと思われる。避難所のパーテーション越しの隣人への贈与品に

もなった。気持ちの可視化であった。

様々な「造形活動」によって作品が生まれるごとに交わされる互いの承認は活動回数が増すごとに、広がり深まっていった。承認と活動中の教え合いで会話が交わされることにより形成された親しい関係は活動後、自宅に戻ってからも持続された。「集う」ことの分かり易い目的に「造形活動」がなり得た。年越しには新年への決意の可視化となった。また、被災高齢者に外へ向かうテーマ「被災者でありながら他者へ施す」を提案したことで被災高齢者を「チーム」に昇華したといえるが、その「施すもの」が人形劇というビジュアル化され、語り、唄うなどの五感に訴えるものであったことが福島県の仮設住宅などで直接的な表現に繋がったと考えられる。

「造形活動」による造形物は自己をビジュアル化し、承認の対象としての作品となり、「集う場」作りの目的となり、他者へ施す目的を明確化するための具体的なツールとしての役割を果たしたと言えるのではないか。

４．２．今後の課題

仮設住宅の特に独居高齢者に参加を呼びかけてきた中で、全ての高齢者の参加は得られなかった。チームへと結束していった住人は独居高齢者エリアの住人の約半数であった。残る半数が全くの不参加という訳ではなかっただけに今後の働きかけに工夫がいると思われる。

被災地における「造形活動」は被災高齢者にとって見知らぬ者同士が集う環境に置かれた場合のコミュニティ形成にたいへん有効であることがわかった。グループホームやデイサービスにおいても活用できる活動であろう。そこで最も大切なことは「造形活動」の指導の継続だけではなく、外に向けて発表する機会の提供であると考えられる。造形のエンドユーザーで終わるのではなく、構成員の共通のテーマを外に発信するという目的を持って行うことこそ「造形活動」に付加しなくてはならない重要な点であると思われる。

５．おわりに

東北に比して、千葉県旭市の復興に関するニュースはめったに聞かれなくなった。しかし、被災者の生活復興への苦悩と努力は今も続いているのである。その時々のニーズを地域全体で総合的にとらえながら、支援していくことが求められているのではないだろうか。

多くの命が犠牲になった「3・11 東日本大震災」の教訓を無にしてはならない。大災害は予告なく起こるのである。そうした災害時に強い地域コミュニティへの転換が図られなければならない。そうした災害時に強い地域コミュニティこそ、誰もが住みやすい地域であると考える。筆者らは、これからも学生らと共に本活動を継続・拡大していく意を強くしている。

【参考文献】

上田敏（2012）「ICF の理解と活用」初版第 18 刷　萌文社

大川弥生（2002）「目標指向的介護の理論と実際」初版第 4 刷　中央法規

折元立身（2003）「介護もアート」KTD 中央出版

障害者福祉研究会（2008）「ICF　国際生活機能分類」初版第 3 刷　中央法規出版

新介護福祉士養成講座 3（2009）「介護の基本Ⅰ」中央法規

デビッド・ロモ著（2011）「災害と心のケア」第 2 版　アスク・ヒューマン・ケア

広井良典（1997）「ケアを問いなおす　＜深層の時間＞と高齢化社会」ちくま新書

藤森立男編著（2012）「復興と支援の災害心理学～大震災から何を学ぶか」福村出版

三井さよ（2004）「ケアの社会学」勁草書房

レベッカ・ソルニット高月園子訳（2011）「災害ユートピア」第 1 版第 3 刷　亜紀書房

資料写真 1～30　松下やえ子撮影

Study on the "care of the heart" in the Great East Japan Earthquake emergency temporary housing
− Based on the practice of other activities "Asobi-itation " and "modeling" in Asahi City, Chiba Prefecture −

Yaeko Matsushita, Yoko Mori

Abstract

Part of the city by the Great East Japan Earthquake that occurred Asahi, Chiba prefecture on March 11, 2011, was damaged by the tsunami and liquefaction.

In the elderly living alone, particularly in temporary housing, there were (disuse syndrome), is becoming increasingly apparent inactive disease and isolated life. In the past, this has become a major issue in shelters and temporary housing after the Great Hanshin-Awaji Earthquake-Chuetsu Earthquake. We believe that working on something older victims motivated as its prevention, body and mind and restore the functions of the original, are going to continue the workshop called " Handcraft play" as a valid activity to it. A combination of "formative" is area of expertise Yoko Mori,"Asobi-itation (rehabilitation)"(coined Haruki Miyoshi) enjoying while moving the body. Disease as well as inactivity and isolation of the elderly living in temporary housing, this paper is intended to introduce the "care" to the community. Be a player on the spot joy of using the body and hand to complete their work, the "Halle" conventions and with their peers, and to teach people the skills I learned have led to the creation of motivation. Creating place continued to make the circulation towards the plus from small things, not even the victims community, it can be obtained in the community of mutual aid essential to the future of an aging society.

Key words：Temporary housing, elderly people living alone, isolated, life inactive disease, Art activities, Asobi-itation, ICF